

ベトナムの大学における「就職面接プロジェクト」の実践から考える教師の役割  
— 学習者のウェルビーイングに焦点を当てて —  
The Role of Teachers in a “Job Interview Project” at a University in Vietnam  
– Focusing on Learners’ Well-being –

山川史, グエン・ヴィエツ・ティ, ベトナム国家大学ハノイ校日越大学  
Fumi Yamakawa, Viet Thi Nguyen  
Vietnam National University in Hanoi, Vietnam Japan University

## 1. はじめに

近年、ベトナムにおける日系企業の進出は加速しており、日本語を学ぶ学習者にとって日系企業への就職は現実的かつ魅力的な進路の一つとなっている。そのため、ベトナムの大学における日本語教育の現場では実践的なビジネス日本語の運用能力の習得だけではなく、その背後にある日本文化やビジネスマナーの理解、さらには異文化間コミュニケーション能力の向上といったより包括的な能力の育成が強く求められている。

一方で、教育分野全般においては知識の獲得に加えて、学習者のウェルビーイング (well-being) を重視する潮流が広がっている。日本語教育研究においても、学習者の心理的側面を支え、学習の持続可能性や学習者自身の人生の充実に資する教育のあり方が模索され始めている (クック平山, 2024; 高橋・クック平山, 2022; 熊谷他, 2024)。しかし、ベトナムの日本語教育現場に目を向けると、依然として教育の主眼が言語能力の向上のみに置かれている傾向があり、学習者のウェルビーイングに焦点を当てた教育実践やその効果に対する議論は十分に蓄積されていない。

そこで、本研究ではベトナムの大学で「就職面接プロジェクト」を実施し、それをもとに学習者のウェルビーイングに資する教育実践の可能性と、そこにおける教師の役割について考察することを目的とする。

## 2. ベトナムの日本語教育事情と教師の役割

ベトナムにおける日本語教育は、経済成長および教育制度改革と密接に関わりながら、大きく発展してきた。2021年時点で学習者数は16万人を超え、その増加率は他国と比べても顕著である (国際交流基金, 2021)。さらに日本語能力試験 (JLPT) の受験者数も増加しており、2023年7月の試験においてはベトナム国内の受験者が26,245人に達し、東南アジアで最も多い受験者数を記録している (国際交流基金, 2023)。この背景には、大学において日本語専攻の学習者に対し、N2レベルの取得を求める制度が導入されていることと関係している。この制度のため、多くの学習者にとって資格取得が日本語学習の目標となっている。

こうした状況のもと、日本語学習者の学習動機には、アニメや漫画、J-POPなどの日本文化への関心に加え、日系企業への就職やキャリア形成といった実利的な目的も強く意識されてきている (国際交流基金, 2023)。その結果、大学教育においても、実践的なビジネス日本語や就職活動に直結する教育内容への要請が高まっている。つまり、日本語教育は学習者が将来、社会において自己実現する

ためのキャリア支援の機能を担うことが求められているのである。このような教育的要請と並行して、ベトナム全体の外国語教育の改革も進められてきた。特に2008年以降、国家プロジェクトとして外国語教育の質向上が推進され、2013年にはベトナム教育訓練省が従来の暗記中心・講義型の授業から、学習者主体のアクティブ・ラーニングへの転換を掲げた。この政策により、教師の役割も知識を伝授する者から変化することが期待されている。すなわち、教師は学習者のニーズを把握し、主体的な学びを促進しながら、学習過程を支える存在としての役割が求められているのである。

しかし、実際の教育現場では、依然として知識伝達型の講義中心の授業形態が根強く残っており、教師は「教える存在」に留まっている傾向にある。ここに、教育政策が示す理念と実際の授業形態との間に大きな乖離が存在している。さらに、学習者のウェルビーイングに配慮した取り組みも十分に行われていない。これらの問題は、ベトナムの日本語教育において重要な課題であり、この乖離を埋めるためには、ウェルビーイングの観点から教育実践を捉え、教師の役割を再考する必要がある。

以上の背景を踏まえ、本研究では「就職面接プロジェクト」の実践を通して、従来の「教える存在」としての教師像を超えて、学習者のウェルビーイングを支えるための新たな教師の役割について検討する。

### 3. ウェルビーイングの概念と日本語教育

ウェルビーイング (Well-being) とは、身体的・精神的・社会的に良好な状態を指す概念であり、個人がいかに充実した人生を送っているかに焦点を当てるものである (前野, 2017)。この言葉は、1946年に世界保健機関 (WHO) が採択した憲章において初めて公式に用いられた。このウェルビーイングの多面的な構成要素を体系的に理解する枠組みとして「PERMA モデル」 (Seligman, 2011) がある。このモデルは、個人の幸福感を高めるために重要とされる5つの要素、すなわち、Positive Emotion (前向きな感情)、Engagement (積極的な関わり)、Relationships (人間関係)、Meaning (意味・意義)、Accomplishment (達成感) から構成されている。各要素の内容は以下の通りである。

まず、「前向きな感情」は、喜び、感動、感謝、希望、思いやりといった肯定的な感情経験を指し、日常生活における幸福感の土台となる。2番目の「積極的な関わり」は、目の前の活動に没頭し、「フロー」状態と呼ばれる集中状態に入ることを意味する。適切な難易度の課題に取り組むことで、この状態を引き出し、学習の効率や達成感を高める効果がある。3番目の「人間関係」は、家族や友人、同僚など他者との肯定的なつながりを構築することであり、それは社会的な支えや帰属意識をもたらす。4番目の「意味・意義」は、自分の活動や経験に価値や目的を見出し、自己の存在や行動が社会とどう結びつくかを理解することである。そして、最後の「達成感」は、努力の末に何かを成し遂げた経験を通して得られる充実感や自己肯定感を指し、次なる挑戦への意欲を育む。

このウェルビーイングの観点は日本語教育において、学習環境との関連 (クック平山, 2024)、多読などの実践活動との関連 (高橋・クック平山, 2022)、言語

教育イデオロギーとの関連（熊谷他, 2024）などで議論されている。それらの議論で共通することは、学習者が日本語を通して自分らしく生きる力を獲得することが社会的ウェルビーイングにつながり、その営みを支えることが日本語教育の役割であるという点である。ベトナムの日本語教育においては、これまで言語知識やスキルの習得が重視されてきたが、これからの時代はこのウェルビーイングという観点を導入することの意義が問われている。特に、学習者一人一人の内面的な成長と持続的な学びを支えるためには、知識の習得のみならず、感情や人間関係、意義といった側面を含む包括的なアプローチが求められていると言える。また、教師もこの PERMA の 5 要素を意識し、教育を実践することが重要であると考えられる。

本研究では、この PERMA モデルを理論的フレームワークとし、この 5 つの構成要素から「就職面接プロジェクト」の実践を考察する。これにより、学習活動が単なるスキル習得にとどまらず、学習者のウェルビーイングを支える教育実践として、どのような意義を持ち得るのかを明らかにすることを目指す。

## 4. 「就職面接プロジェクト」の実施概要

### 4.1 目的と対象者

本プロジェクトの目的は学習者が自らのキャリア観を見つめ直し、自己理解を深めながら就職活動に必要な実践的スキルを身につけることである。最終的には、学習者が自信を持って実際の就職面接に臨めるようになることが期待されている。

実施対象者は、ベトナムの大学に在籍する日本語上級レベルの学習者 6 名であり、2025 年実施時は 3 年生であった。彼らは高校時代から日本語を学習し、日本語能力は調査時で N2 レベル程度に達している。専攻は日本語教育専攻 2 名、経済専攻 2 名と法律専攻 2 名である。本プロジェクトが 3 年生を対象とした理由は、翌年の夏に予定されているインターンシップの獲得に向け、日本語での面接の準備が必要だからである。そのため、教師は、そのような学習者のニーズを把握した上で「就職面接プロジェクト」をデザインした。したがって、本プロジェクトは単なる授業活動を超え、学習者のキャリア形成に直結する非常に現実的のものとして位置づけられている。

### 4.2 実施方法と教師の支援

「就職面接プロジェクト」は 2024 年 9 月から 12 月の 15 週間にわたり、通常の日本語授業の「会話」科目に組み込む形で計 4 回実施された（表 1）。模擬面接の最終回は、期末試験の口頭試験として位置づけ、実施した。

表 1 教科書およびプロジェクトのトピックと実施日

	教科書のトピック	本プロジェクトのトピック	模擬面接実施日
第 1 課	自己紹介で好印象を与えよう	自己紹介	5 週目 2024/10/8
第 2 課	きっかけを語ろう	志望動機	8 週目 2024/10/28
第 10 課	最近の出来事	学生時代の出来事	11 週目 2024/11/24
第 12 課	将来の夢を語ろう	将来の夢	期末口頭試験 2025/1/5

3年生の日本語コースは週5日、1日2コマ(50分×2)、月曜日から金曜日までである。その科目の内訳は「総合」が2回、「漢字」が1回、「会話」が2回である。本プロジェクトが実施された「会話」の授業では、『日本語上級話者への道：きちんと伝える技術と表現』が指定の教科書である。そのため、この教科書を活用しつつ、表1に示したように、その内容のトピックをビジネス場面に変更する形でプロジェクトを実施した。このことにより、学習者は教科書で学んだ表現や談話構成を活用し、より自分自身に身近な就職面接の準備として捉えることができる考えた。

実際にどのように実施したのか、第10課を例として説明する。第10課の教科書の内容は「最近の出来事」であり、その課の目標は学習者が1)出来事を分かりやすく伝えること、2)引用を効果的に用いること、3)感情を生き生きと伝え、共感を得ることであった。授業では、まず教科書の流れに沿って、語彙や表現の意味や使い方について理解を深めた。次に、出来事の時系列や感情の変化、話の構成や順序についても確認した。そして、学習者はそれぞれ自分自身の最近の出来事について、体験した内容やその時の気持ちなどを詳しく書いたスクリプトを発表した。その発表後、本プロジェクトのトピックである「学生時代の出来事」について移行した。その際、教師は学習者に「最近、挑戦したことや達成したことについて、それがどのような影響を与えたかを述べてください」、「最近、新たに学んだことや気づきを教えてください。それが自分の仕事観やキャリアにどのような影響を与えると考えますか」、「最近、特に印象に残っている出来事は何か。その出来事が自分にとって、どのような意味を持ちますか」といった質問をし、それぞれ学習者に考えてもらった。そして、それらを「学生時代の出来事」というトピックでまとめ、次の5つのポイントを含め模擬面接用のスクリプトを書くよう指示した。その5つのポイントとは、1)出来事の概要、2)出来事で感じたことやその結果、3)取り組みの過程や工夫点、4)結果と学んだこと、5)自分にとってその出来事が持つ意味、である。スクリプト作成後、模擬面接の前に学習者はクラスメイトと教師の前で発表を行い、フィードバックを受けた。そのフィードバックをもとに修正を加え、スクリプトを完成させた上で、当日、模擬面接に臨んだ。模擬面接では、担当教員だけではなく、日本人教員も面接官として参加した。そして、模擬面接後に学習者は、担当教師および日本人面接官の両者からフィードバックを受けた。

この「就職面接プロジェクト」は自己分析や企業調査をし、自分の経験などを振り返り、自分を見つめ直すことを中心に実施された。その一連の過程を通して、教師は学習者の内省を促すための問いかけや感情面に配慮した対話的なフィードバックを行うことで、学習者の言語面および心理面の両方を支援できるよう心がけた。そのため、毎回、ひとりずつ個別にフィードバックをする「個人セッション」を設けた。このセッションでは、学習者一人一人が自分の感情や考えについて自信を持って言語化できるよう支援した。また、その過程に寄り添いながら学習者の語りを尊重し、安心して自己表現できる環境を整えることを試みた。このように本プロジェクトにおいて、教師は学習者との対話を通して彼らの声に耳を

傾け、彼らの意見や感情を尊重し、彼らが安心して自己表現できるような伴走者としての役割になるよう努めた。

## 5. 調査概要

本調査の目的は、本プロジェクトを通して、学習者がどのような学びを得たのかを明らかにすることである。そのため、履修者6名を対象にアンケート調査を実施し、さらに回答の内容を補足するため、フォローアップ・インタビューを行った。アンケート調査では、プロジェクトの有効性や学習者の変化を多面的に把握するため、以下の6つの質問項目を設定した。

- 1) 本プロジェクトは就職面接の準備に役に立ったか。
- 2) 模擬面接で日本人面接官と面接した感想はどうだったか。
- 3) 実際の面接で日本人面接官と話す自信がついたか。
- 4) 模擬面接を通してベトナムと日本文化にどのような気づきがあったか。
- 5) 本プロジェクトを通して言語以外で、どのようなことを学んだか。
- 6) コース終了後、実際に就職面接を受ける機会があったか。

これらの質問は言語的・文化的側面に加えて、キャリア的・心理的側面の学びを広く捉えることを意図している。アンケートは最終授業の終了後に配布し、回収した。回答の多くは、ベトナム語で記述されていたため、分析の際には日本語に翻訳した。その際、語彙の曖昧さを避けるために逐語訳を基本としつつ、日本語として適切な表現となるようにした。分析においては、まず YES/NO 形式の質問については統計的にまとめた。次に自由記述については、内容の類似性に基づいて回答を分類し、まとめた。

さらに、アンケート結果の理解を補うため、その6名に対して個別に約10分ずつフォローアップ・インタビューを実施した。インタビューでは、アンケート回答を踏まえつつ、回答理由や具体的エピソードを尋ね、学習者の語りを引き出すことに重点をおいた。これにより、単なる表面的な回答では把握できない学習者の内面の変化や感情の揺れを明らかにすることを試みた。

なお、調査を実施および研究成果の公表にあたっては、倫理的配慮を行った。まず、調査目的と内容、使用目的について事前に説明を行い、自由意志による参加同意を文書で得た。次に回答は匿名化し、個人が特定される情報は研究成果に一切含めないことを明示した。また、参加を拒否することや途中で辞退することによって不利益が被らないこと、データは研究目的以外には使用しないことなどについても確認した。アンケートとフォローアップインタビューは、このような倫理的配慮を行い、承諾を得た上で回収および録音を行った。

## 6. 結果

ここでは、設定した6つの質問項目に基づき、学習者の回答を整理し、本プロジェクトがもたらした学習効果を明らかにする。

- 1) このプロジェクトは就職面接の準備に役に立ったか。

6名全員が「役に立った」と回答した。その理由として、①実際の面接に必要な準備内容を具体的に理解できたこと、②適切な回答の方法や表現を学ぶことができたこと、③面接時の態度・姿勢に対する意識が高まったこと、が挙げられた。これらは、単なる知識習得にとどまらず、学習者が面接に対して抱いていた漠然とした不安を軽減し、自信を獲得することにつながっていたことがわかった。また、模擬面接を通して日本的な面接マナーの価値観を体験的に学んだことにより、文化的な理解が深まったことも明らかになった。

2) 模擬面接で日本人の面接官と面接した感想はどうだったか。

学習者からは「本番に近い緊張感を体験できた」、「実際の面接に備える良い機会となった」という肯定的な意見が寄せられた。特に、日本人面接官とのやりとりを通して、日本語のイントネーションや発音を直接聞くことができたことが役に立ったという。日本人が面接官になったことは、教室内の学習では得られなかった臨場感が生まれ、面接の実践的な意味が強調されたと考える。模擬面接は単なる練習にとどまらず、しっかりと準備を行えば面接を怖がることなく実際の採用面接に通用する、というリアルな感覚を学習者に与えた点に大きな教育的意義があったと言える。

3) 実際の面接で日本人面接官と話す自信がついたか。

6名全員が「自信がある」と回答した。ただし、「仕事に関する専門用語や敬語については一部不安がある」という学習者もいた。しかし、模擬面接を繰り返し体験することで、「会話のリズムや日本語独特の言い回しに慣れる」ことができ、以前に比べて「日本人との面接場面でのコミュニケーションに自信が持てる」ようになっていたことがわかった。つまり、本プロジェクトは学習者の言語的スキルの向上に加え、心理的側面における自信形成にも効果があったと言える。

4) 模擬面接を通してベトナムと日本文化にどのような気づきがあったか。

学習者は、模擬面接を通して日本の面接場面において、例えば「前置きやあいづちの多さなどに気づいた」という。これは、直接的なコミュニケーションの傾向にあるベトナム文化と比較し、顕著に認識された点であった。こうした気づきは、単なる日本語を学ぶだけではなく、言語使用の背後にある文化的価値観を理解するきっかけとなっていたことがわかった。つまり、模擬面接が学習者にとって「文化の鏡」として機能しており、文化的差異の気づきを促し、日本企業の面接場面をイメージする助けとなったことが明らかになった。

5) 本プロジェクトを通して言語以外で、どのようなことを学んだか。

学習者は、言語以外にも多様な学びを得ていた。具体的には、「面接時の服装や規則など、実践的なビジネスマナーを体験的に身につけることができた」と回答していた。また、「プロジェクト活動全体が有意義で楽しかった」、「クラスメイトからのフィードバックが役に立った」といった声もあり、協働的な学習環境が肯定的に評価されていることがわかった。つまり、本プロジェクトがクラスメイトと協力して何かを達成する重要性を学ぶ機会にもなっていたと言える。特に、ペアやグループでの活動を通して、相互に意見を出し合い、助け合いながら、改善していくという対話的過程が他者と協力して課題を達成するという姿勢を育

むことにつながっていたのではないだろうか。これは、職場でも重視されるチームワークや協働性の基礎的な経験となった点で意義があると言える。

6) コース終了後、実際に就職面接を受ける機会があったか。

6名中5名が実際にインターンシップを獲得するために、日本語で面接を受け、そのうち3名が合格していた。5名の学習者からは「プロジェクトで学んだビジネスマナーと敬語を生かすことができ、合格できた」、「自信を持って面接に臨むことができた」、「不合格だったが、日本企業は『最も優秀な人材』ではなく『最も適した人材』を選ぶということがわかった」といった声があった。このことから、本プロジェクトが面接時での大切なことへの気づき、実践的なビジネス日本語能力の向上や学習者の自信獲得にもつながっていたことがわかった。

以上の結果から、本プロジェクトは学習者に対して多面的な学習効果をもたらしたことが明らかになった。第一に、学習者は面接に必要な具体的な知識や実践的なスキルを習得することができ、自信を獲得することができた。第二に、日本とベトナム文化の違いに気づく契機となり、異文化理解を促進することにもつながった。第三に、日本語だけではなく、ビジネスマナーや協働性の重要性を学ぶ機会になった。これらの効果は実際に学習者がインターンシップの面接において、学習成果を活用できた点で、その実効性があったと言える。コース終了後、6名全員が日本語能力の向上だけではなく、「将来の自分自身を見つめる機会」として、本プロジェクトを捉えていることがわかった。

## 7. 学習者のウェルビーイングと教師の役割

アンケート調査およびフォローアップ・インタビューから得られた結果をPERMAモデルの5つの要素に基づいて整理した(表2)。

表2 PERMAモデルに基づく分類

	5つの要素	学習者からのフィードバック
1	Positive Emotion 前向きな感情	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しかった</li> <li>・クラスメイトの発表を聞くのは面白かった。</li> <li>・面接に対して自信がついた。</li> <li>・学習のモチベーションが上がった。</li> <li>・卒業したら日系企業で働きたくなった。</li> </ul>
2	Engagement 積極的な関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・模擬面接の練習に積極的に取り組んだ。</li> <li>・時間の管理と責任感をもって取り組んだ。</li> </ul>
3	Relationships 人間関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラスメイトが仲間として支え合える存在になった。</li> <li>・授業外でも先生に面接や仕事の相談ができた。</li> </ul>
4	Meaning 意味・意義	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本のビジネスマナーとその考え方がわかるようになった。</li> <li>・本番の面接のためのいい準備になった。</li> <li>・自分の強みと弱みを知ることができた。</li> <li>・将来のキャリアビジョンを持つことができた。</li> <li>・自分自身を見つめ直す力がついた。</li> </ul>
5	Accomplishment 達成感	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インターンシップの面接に合格できた。</li> <li>・授業で練習した敬語やマナーを実際の面接で使えた。</li> <li>・自分の成長を感じた。</li> </ul>

この分類に基づき、本プロジェクトが学習者のウェルビーイングにどのように寄与したか、また、そこから導き出される教師の役割について以下、考察する。

まず、**Positive Emotion**（前向きな感情）についてである。学習者の多くが「楽しかった」、「クラスメイトの発表を聞くのが面白かった」といった意見を述べており、活動自体に喜びや楽しさを感じていた。さらには「面接に対する自信がついた」、「学習のモチベーションが上がった」という意見もあり、このことから前向きな感情が学習態度や進路意識にまで波及していることがうかがえる。この前向きな感情が生まれた背景には、教室での安心できる環境やそれぞれの学習者の一つ一つのタスクにおける成功体験があったと考えられる。そして、この前向きな感情により、彼らは学習意欲をさらに高め、次のへの挑戦意欲へとつながっていったのではないかと考える。

次に、**Engagement**（積極的な関わり）については、「模擬面接の練習に積極的に取り組んだ」という回答のように、全員が模擬面接のタスクに主体的に取り組み、責任感を持って準備していた。授業外でも自主的に面接の練習を行った学習者も見られ、タスクへの積極的な関わりがあったことが確認できた。この背景には、授業でのタスクが学習者にとって適切なレベルであったこと、また自分の課題として取り組むことができたことが挙げられる。逆に言えば、タスクが自分の日本語能力や興味に合っていないならば、そこまで積極的に取り組む姿勢は見られなかったであろう。その意味で、学習者のレベルや興味・関心をタスクに反映させることはプロジェクトをデザインする上で重要であると考えられる。学習者は適切な挑戦とサポートのバランスの中で、自己効力感を高めていくことで、さらに次なるタスクに対しても積極的に関わっていくことができたのではないだろうか。

**Relationships**（人間関係）については、学習者は「クラスメイトが仲間として支え合える存在になった」、「授業外でも先生に相談できた」といった声があった。これは、心理的に安心できる学習環境が形成されていたことを示している。学習者同士はもちろん、学習者と教師の間の信頼関係も形成されていた。ただ、この信頼関係は最初から形成されていたわけではなく、協働活動を通して培われていったものであった。ウェルビーイングにおける人間関係は、学習持続には欠かせない基盤とされており、本プロジェクトにおいても仲間や教師との信頼関係およびサポートが学びの挑戦への安心感を与えていたと考える。

さらに、**Meaning**（意味・意義）については、学習者は「自分の強みと弱みを知ることができた」、「将来のキャリアについて考えることができた」と述べていた。これは、自己理解が深まったことを示唆している。また、「日本のビジネスマナーとその背景が理解できた」という声もあり、プロジェクトの意義を個人的な学びと社会的文脈の双方に見出していることがうかがえる。学習が自己の成長と社会とのつながりの両面に意味づけられたことは、ウェルビーイングを高める重要な要因であると考えられる。

最後に、**Accomplishment**（達成感）については、インターシップを獲得した学習者は「授業で練習した敬語やマナーをそのまま活用できた」と語り、成果としての達成感を獲得していた。インタビュー時で不合格であった学習者も「自分の成長を感じた」と述べ、学びの過程そのものを成果として捉えていた点は注目に

値する。つまり、結果の合否を超えてプロジェクトを通して自己の成長を感じていたと考えられる。この背景には、教師が一人一人の学習者の努力を認め、その努力を評価することで学習者が「できる」という感覚が強化されたと考えられる。

この6名の学習者はもともと学習意欲が高く、好奇心旺盛であったが、本プロジェクトを通してクラスメイトと共に学ぶ楽しさをさらに感じ、自己表現をする自信がさらに向上したと考える。また、どの学習者も毎回の模擬面接のタスクに主体的に取り組む姿が見られたが、学ぶことが楽しいという感情を持ち、タスクに積極的な関わるためには学習者同士だけではなく、学習者と教師の間の人間関係が良好でないと難しい。その点、このクラスには安心して学べる空間があり、お互いに信頼できる関係が構築されていたと考える。さらに、なぜこの活動を行うのか、というプロジェクトの意味や意義を学習者一人一人が自分ごととして捉えることができたため、深い学びにつながったと考える。そして、日本の企業でインターンシップをしたいという目標のもと、それに向かって努力し、その結果、実際にインターンシップを獲得したことは大きな達成感につながったと考える。インターンシップを獲得できなかった学習者にとっても、本プロジェクトを通じた自己理解や成功体験が達成感につながっていったことは意義があると考えられる。

以上のように、「就職面接プロジェクト」がPERMAモデルの全要素に関わる学習効果を生み出し、学習者のウェルビーイングを多面的に促進する活動であったことが示唆された。この学習者のウェルビーイングが促進された背景には、教師の柔軟かつ意図的な関与があったと考える。本プロジェクトにおいて教師が果たした役割について整理すると、以下の3点に集約できる。

第一に、教師が学習者に安心感を与える学びの場のデザインをしたことである。特に模擬面接では、失敗を恐れずに挑戦できる環境が不可欠である。教師は授業内外で学習者一人一人と対話する時間をとり、彼らの意見や感情に寄り添った対応を心がけ、学習者の意見を尊重することで、学習者に安心感と自信を与えることができたのではないだろうか。第二に、対話的支援による学習者の自己理解を促進したことである。個人セッションでは内省を促す問いかけを行い、学習者が自己の経験を言語化し、意味づけるプロセスを支援するものであった。この支援が **Meaning**（意味・意義）の形成や **Accomplishment**（達成感）の実感を後押ししたと考える。第三に、「伴走者」としての存在である。教師は、正解を教えるのではなく、学習者が自らの言葉で語り、問いを持ち続けられるよう、学習者とともに課題に向き合いながら成長を支える「伴走者」として機能していたと考える。これは、教師の役割を「知識の伝達者」から学習者のウェルビーイングを支える存在としての「伴走者」へと再定義するものである。

「就職面接プロジェクト」は単に面接スキルを習得するだけではなく、学習者の前向きな感情、積極的な関わり、人間関係、意味・意義、達成感のウェルビーイングの5つの要素を促進する教育実践であった。その基盤には、安心できる学習環境のデザイン、学習者の内省を支える対話的支援、そして学習者に寄り添う「伴走者」としての教師の存在があった。これらは、今後のベトナムの日本語教育における教師像の再考を促すものであると言える。

## 8. まとめと今後の課題

本研究では、ベトナムの大学における「就職面接プロジェクト」の実践の意義を明らかにした上で、それを学習者のウェルビーイングの観点から考察し、そこから導き出される教師の役割について検討した。その結果、学習者の学びを生み出すためには、プロジェクトそのもののデザインだけでなく、教師の意図的で柔軟な関与が不可欠であることが明らかになった。特に、学習者一人一人の感情や意見に耳を傾け、安心して挑戦できる環境をデザインすることが学習意欲の継続や自己効力感の向上につながっていた。このような教師の「伴奏者」としての姿勢は、従来の知識を教える存在を超え、学習者の内面に寄り添い、ともに成長する関係性を築くものである。こうした知見は、日本語教育において学習者のウェルビーイングを重視した教育をデザインする上で重要な示唆を与える。つまり、言語習得の成果を目指すだけでなく、対話をもとに学習者が自らのキャリアや人生に意味を見出し、達成感や自己肯定感が得られるよう、教師は「伴走者」として支援することが求められているのではないだろうか。

本研究では、一事例をもとに教師の役割を考察したが、今後はより多様な学習者や教育現場での実践を積み重ね、学習者のウェルビーイングに資する教師の具体的な支援のあり方について考察していきたい。また、学習者のウェルビーイングを促進する教育実践が教師自身のウェルビーイングとどのように関連するのかについても検討しておく予定である。学習者と教師の双方のウェルビーイングが相互に作用し合う教育環境こそが、今後の日本語教育の持続的発展に不可欠ではないだろうか。

## 参考文献

- クック平山史子 (2024) 「シラバスを変える：ウェルビーイングに焦点をあてた学習環境の考察」 *Proceedings: The 28th Princeton Japanese Pedagogy Forum*. Princeton University. 18-45.
- 熊谷由里・尾辻恵美・佐藤慎司 (2024) 「『言語のシステムが壊れちゃった!』：個人と社会のウェルビーイングに向けて」 『社会言語科学』 27, 31-46.
- 国際交流基金 (2021) 『ベトナム 2021 年度日本語教育機関調査結果』  
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2022/vietnam.html>  
(2025 年 8 月 12 日)
- 国際交流基金 (2023) 『ベトナム (2023 年度)』  
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2023/vietnam.pdf>  
(2025 年 8 月 12 日)
- 高橋温子・クック平山史子 (2022) 「多読によるプラス要素の再考：通常授業内の『ちょこっと多読』がもたらす学習者のウェルビーイングへの有効性」 *Smith ScholarWorks*. East Asian Languages and Cultures: Faculty Publications. 243-257.
- 前野隆司 (2017) 『実践：ポジティブ心理学：幸せのサイエンス』 PHP 研究所.
- Seligman, M.E. (2011). *Flourish: A Visionary New Understanding of Happiness and Well-Being*. New York: NY Free Press.